慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジュリアン・グリーンの内心の旅路
Sub Title	Le Voyage Intime de Julien Green
Author	佐分, 純一(Saburi, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1953
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.2, (1953. 2) ,p.71- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00020001-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュリアン・グリーンの内心の旅路

佐分純一

數多のフランス作家の中でも、こゝに取上げたジュリアン・グリーンといふ小説家は、單にその作品傾向ばかりでなく、名前が示す樣にその生ひ立についても亦特異な存在である。本論に入る前に紙面の許す範圍で先づ經歴について簡單に述べることにする。

現存作家である上に、さして問題とされてゐる人ではないだけに、この作家の生ひ立について餘り詳しい文献はないが、筆者が調べた記錄だけについて少し書いてみよう。

グリーンの遠い先祖については、日記によると、十八世紀中葉ザルツブルグの司教に追放されてアメリカに逃れたプロテスタンの中に先祖の一人が入つてゐたといふこと、同じく十八世紀後半に他の先祖がイギリス政府配下で私掠船の船長をしてゐたこと等が明かとなつてゐる。「フランス現代人名辭典」及びアン・グリーン(ジュリアンの姉)著「過ぎしわが年月」Ann Green《Mes Jours évanouis》traduit de l'anglais par Maria Canavaggia (Plon 1951) によると、父親エドワード・ムーン・グリーンは一八五三年アメリカのヴァージニヤ州ワレンソンに生れ、母メアリ・アデライド・ハートリッヂはジョージヤ州サヴァナで四年後に誕生した。ジュリアンの父方の祖父はイギリス人だつたから、前記の先祖とも併せ考へると、かなりイギリスの血もひいてゐる譯である。エドワードはメアリと一八八〇年に結婚し、父親の遺産を繼いで後、ガス會社の社長にまでなつた爲、一時はかなり裕福だつた。所が十年後、數人の子供を儲けながら、彼は株に失敗した上、所有の果樹園が凍害に遭ひ、別莊が燒ける等、不運が度重つて破産に陷つた。窮餘の策も及ばず、遂に一八九三年、友人の勸めでフランスのル・アーヴルにある綿貿易の代理店に職を得て、家族共々渡歐の途についたのである。エド

ワードは嘗て父親が再婚した關係上、學生々活をヨーロッパで過した經驗があつたので、この境遇は寧ろ救ひとなつたが、特にアメリカ南部に強い愛着を持つてゐた妻メアリにとつて、未知のフランスに馴染むことは容易でなかつた。然し、夫を愛し、生活力の強い彼女は、六人の子供を抱へながら、夫の僅かな收入でよく家事を切盛りした。ル・アーヴルから彼等は間もなくパリに轉居したが、六人の子供の中四人がアメリカ生れで、下の二人はフランスで生れてゐる。從つてその子達の弟に當るジュリアンは、パリに移つてから生を享けた譯である。

萬國博覽會と共に二十世紀といふ時代がかうしたさゝやかな移民グリーン家にも訪れた。

長子チャールズ以後男の兒に惠まれなかつたグリーン夫婦、特にエドワードは、萬國博の今年こそ男の兒が生れるのだと意氣込んだ。果して同年九月六日、晴天の朝、天は彼に幸したのだつた。當日の好々爺の歡びやうをアンの筆から借りよう。——九月六日の晴れた朝、パパが涙をクス〳〵させ云ふもどかしさうにママの部屋からあたふたと出て來た。七時だ。誰かにこの大ニュースを知らせなければならない。(中略)パパはそゝくさと小さい娘達の傍へ行つた。二人は眠てゐたが、リュシイは床の中で振返つて彼を見つめた。「さあ〳〵みんな！　嬉しいぞ！　嬉しいぞ！　何故だか解るか？」娘達は床の上に坐つて耳をそば立てた。朝のもの音を破つて、泣聲が長く響いた。日の目を見た赤坊のむづかる叫び聲だ。——

この子が母方の祖父の名をついだ他ならぬジュリアン・グリーンなのである。この新たな子寶に惠まれたグリーン夫妻に再びいゝ條件が訪れた。一九〇二年エドワードの舊友がパリへ來て、その勤先たる南部綿油會社の支店を幾つかヨーロッパに出したいから、エドワードにその代表者になつて貰へぬかと申出たのだ。かくてこのよき父親は、歐洲各國を廻りトルコ、ロシヤ、バルカンの方にまで足を伸す仕事に精勤することゝなつた。從つて、ジュリアンの幼時はグリーン家の生活が軌道に乘つた頃だつた譯である。

一九〇六年、學校に入つたジュリアンは勉強しないでよく繪を描いてゐたといふことである。父親が或日、本が讀めるかどうかと問ねた時、母親はそれを止めて、「この子は繪を描いたりお伽話を聽いたりしてゐるんだからほつておいて下さい。とてもお利口なんですよ。」と辯護した。この頃からジュリアンは繪が好きだつたらしい。アンの回想錄によつても伺はれるが、グリーン自身も知的精神的教

育は母親の方に負ふ所が大きいと考へてゐる。彼女は子供達を幼い頃から聖書に親しませて、「見えないもの、宗教について知つてゐることをすべて」[1] 教へ、又純粋にフランス教育を受けたジュリアンにイギリスの本を讀ませたのも母親だつた。

リセ・ジャンソンに入つてからも最初は相變らずだつたので、零點ばかり採つて母親からムッシュー・ゼロといふ綽名を付けられた。然し、彼女は別に咎めもせず、息子が蝶の樣に振舞ふのをそのまゝ長い眼で見守つてゐた。メアリは息子の藝術的素質を感付いてゐたのだらうか、十歳にしてジュリアンは詩をものしたといふことである。

ジュリアンの記憶に「その足音も聲も歌ひ聲も永久に跡をとゞめた」と云ふ「才氣あり善良な」母親メアリは、多年の苦勞がこたえてか、夫より十餘年も早く一九一四年に他界したのである。生來感受性強く內氣で夢想的なジュリアンにとつて、母親を早く失つたといふことがその精神生活に大きな影響を及ぼしたのは云ふ迄もない。

その後、ジュリアンは次第に勉強して父親の願ひに叶つたモハン生となつた。

第一次大戰中、リセを出ると十七歳で志願してフランスの野戰病院付となり、更に翌年砲兵隊で數ヶ月勤務した。戰爭が終ると間もなく初めて第二の故國へ渡り(一九二〇年)、ヴァージニヤ大學で二年學んだ後歸佛した。當座は好きな繪に親しんで、グランド・ショオミュールといふ研究所へ通つたりしたが、深くその道に進む氣もなく繪筆を捨てゝしまつた。自信がなかつたからでもあらうが、更に直接の動機となつた面白い事實がある。グリーンは二二年父親の紹介でアメリカの女流作家スタイン及びその兄と知り合つた。兄夫妻はグリーン家の近所にゐたが、女流作家の義姉に當るスタイン夫人から、グリーンは當家にあるマチスの作品を澤山見せて貰つた。結局その雄筆に氣押されて、永久に畫業を斷念させられ、繪筆の代りにペンをとるやうになつたといふのが、グリーンの僞らぬ氣持だつたらしい。

爾來作家としての生活が始まつた次第だが、それも最初から世に出た譯ではなく、先づ英文學の研究紹介に手をつけ、二、三匿名などで雜誌に發表した。勿論、大學時代にも小品を書いたことがあり、ひそかに創作してはゐたものと想はれるが、グリーンが小說家として文壇に出たのは、二十六年發表した「モンーシネール」《Mont-Cinère》を以て魁とする。さうして更に翌年の「アドリエンヌ・ム

ジュラ」〈Adrienne Mesurat〉が、初期の代表作として彼の名を搖がぬものとしたのである。その後の作については後段及び作品年表に讓ることゝして、以下少しく附け加へようと思ふ。

兩親の明るい性格や活動的な生活態度或は樂天的な傾向とは全く違つて、ジュリアンは生來孤獨を好み、瞑想的な暗い性格だつた。その性向が彼の生活態度によく顯はれ、作家となつてからの日常も引籠り勝で、創作以外には讀書、散策、繪畫音樂演劇等の鑑賞に獨りで時を過してゐる。會合に出向いても多くはさして感銘も得ず、交友關係もジィドの他には親しい文士仲間も持たない。かういふ調子であるから、勿論社會人としての活動を彼の半面に見出すことは出來ない。たゞ旅行が好きで、フランスに定住しながらも、屢ゝ歐米各地に見聞を廣めることは怠つてゐない。その主なるものを日記から拾つてみると、――三二年春にはオランダ。同年末から翌年にかけて三ヶ月位再度のアメリカ旅行。イタリーに三五年春。翌年秋及び三七年冬二回に亙りロンドンに滯在。三七年春から夏にかけ三度目の滯米。その他、チュニスやストックホルム、コペンハーゲン等にも赴いたことがある。

第二次大戰の直前（五月十六日）パリを離れ、一時南西部に滯在して後アメリカへ渡つた。大戰中は初めバルチモアに居て（一九四〇―四二）女學校で教鞭を取つた。その後も主として當地とニューヨークを往復し、現代佛文學に關する講演を依頼されたこともあるが（一九四四）、普段はつましいアパート住ひをしながら憂鬱な日々を過した。人一倍悲觀的なグリーンは、戰況に一喜一憂、敗戰の母國を案じながら、卒直な氣持を日記（第四卷）に吐露してゐる。又、初めて直接英文で著した「幸福な日々の想ひ出」《Memories of happy days》も、フランスやパリ生活に關する懷舊の情を綴つたものゝ樣である。時には祖國への憂慮に堪へず、フランス向の放送（一九四三年中）をしたこともあつたが、元來遲筆のグリーンは、戰爭氣分にとらはれて、全く筆が重くなつたらしく、この間小說は一作も發表してゐない。

日米戰終結の報に接するや、直ちに旅裝をまとめて四九年九月十九日、アメリカを去り、同月三十日五年振りで懷しいパリの土を踏んだのである。戰雲に閉された滯米期間は、フランスのことばかり思ひ續け、今度還つたらパリを新しい眼で見直さうといふ期待に滿ちてゐた。所がいざパリを久し振りで歩いてみると、豫期に反して一向感動しない。昔と變らぬ感じだつた。「私はまるで自分が夢の

中で出發して、眼が醒めたとたん、家にゐることに氣付いた人間の樣な感じがした。自分の部屋にゐて、驚く者もあるまい。」(2) かうした感懷は、フィガロ紙に載せた歸朝の第一印象であるが、之だけ見ても如何にグリーンがフランスの大氣にとけ込んでゐるか、察するに難くない。思想的な意味では、現實世界に身の置き處がないと云ふこの作家にとつて、創作生活を送ることが許される世界は、フランスをおいて他にはないと斷言することが出來よう。

◇　◇　◇

藝術といふものが既成の現實に對する人間精神の否定或は反抗の現れである以上、藝術家が人間精神の優位を主張するのは當然である。中就內面的な傾向に屬する者は、思想、表現內容の如何を問はず、自己延いては人間の內面世界に絕對的な優越性を認める。今世紀の文學についても、この傾向の作家は單に自己を客觀視するばかりでなく、その裡に生きながら外的價値とは違つた獨自の眞實を攫まうとする生そのものを表出してゐる。ロベール・カンテルが「現代人はもはや世界を哲學的もしくは宗教的な體系の框に入れて解釋することが出來ず或はさうしようともしなくなつた。彼は自己の內的な生の體驗から遠ざかるまいとする。」(3) と云つてゐるやうに、現實生活に於ける作家の强烈な主體性は、そのまゝ作品の根柢となつて作中人物の中に迸つてゐる。かうした作家自體と現實世界との大きな背反が、作中人物の著しい現實喪失感となり、或は自己と外界、夢と現實の倒錯となつて顯はれて來る。この樣な作家が內面に眞實を探求しようとすればする程、外界を否定し、敵視さへして、益ゝ自己の裡にくひ入らなければならない。內心を凝視するにつれ、外界との間に深淵を覺え、その無意味さ、自己と外界との不條理な關係を强く意識せずにはゐられない。ジュリアン・グリーンの生は正にその極端な例であり、彼のすべてが兩大戰間の不安を表はしてゐると同時に、人間の一つの生き方を如實に示してゐると思ふ。

この作家がかくも著しく內的傾向を示すに到つた大きな原因は、勿論その複雜な性格にあると考へられる。イギリス系の血を引いて、自分でも云ふやうに、アイルランド的な衝動性、夢想性、肉感的な要素を有し、アメリカ南部の特徵もある先天性を享受した上で、後天的なフランスの性格を併せ持つといふ樣に、複雜なその本質は、性格學の對象ともなるべき多樣性を含んでゐる。次にもう一つ思ひ當ることは、前に一寸觸れた如く、彼が夙く母親を失つたといふ不幸な體驗である。精神分析學によれば、臆病な子供を母親から離す

ことは、特に不安のもとゝなるといふことであるから、グリーンの場合もさういふ解釋が許されるであらう。十四歳にして優れた母を失つてから、「常に漠然とした危機感を抱いて生きて來た」(4) といふ彼自身の言葉がその事を裏書きしてゐる。他の作家を考へても、コンスタン、ネルヴァル等夙く母を失つた者、ボオドレールの如く母の再婚によつて精神的に孤獨となつた者、ミロスの樣に兩親と離れて幼時を過した者等々、何れも性格的にはグリーンと多分に似た所がある。彼自身では、かうした性格要素に均衡を與へてゐるのはフランス的なものだと云つてはゐるが、そのバランスがとれぬことは作品や日記を讀めば明かである。さうして複雜な內攻性に加へ彼の信仰が又強く現實世界を否定し、彼をして益ゝ外界から隔絕させる傾向を辿つてゐる。

現代小說では、何等かの意味に於て、冒頭から主人公と現實世界との著しい對立が認められるのであるが、試みにグリーンの作品を繙いてみても、讀者は直ちにその事を最も單純な形で直觀するだらう。そこでは主人公が最初から現實とそぐはぬ狀態に投げ出されて居る。主人公は作品以前に周圍の平板なリズムを亂してゐるとも考へられるのである。例へば、「モンーシネール」では、「エミリイは默り續けてゐた。」(5) といふ文句から始まつて、母親の話し掛ける言葉には耳も貸さず、「彼女は母親に背を向けて窓から眺めてゐた。」(6) と書かれ、又、「アドリエンヌ・ムジュラ」では、「アドリエンヌは佇んで手を後ろに組み、墓場(先祖の肖像のこと)を見つめてゐた。」(7) といふ風に書き始められてゐる。どの作品でも主人公達は環境を前に控えながら、その心は別の何物かを追求めてゐることが先づ眼につく。かうした前提のもとに、初期の作品では、外界の齎すアンニュイとそれから逃れようとする人間の喘ぎ、現實條件に對する反抗や反動が心理的な角度から描かれてゐる。右の二作では、主人公の描く理想世界と現實世界が、心理を超え、明確で素朴なアンチテーゼとして作品に象徵されてゐる。主人公の執拗な現實否定の意識は、現實世界に對する冷靜な判斷を失つてマニヤ的な空想にまで昂揚する。或は他愛のない少女の夢想或は異常なサディスムによる破壞的行爲等を通して、作者の別の世界への志向が迸つてゐる。この場合、抑壓する者と支配される犧牲者との對立が一見異つた樣相を帶びてゐるが、グリーンの作品では、よく考へると兩者が結局同じものを求めながら反對の方向をとつてゐることが解る。一方は現實的所有欲のエゴイズムとなり、他方は非現實的な所有に對する渴望となつて、その彼岸に孤獨の不安を救ふべき安定した據り所を模索するのである。

更に中期の作品、殊に「もう一つの眠り」《L'Autre Sommeil》や「幻に生きる人」《Le Visionnaire》になると、作者自身の可視的世界に對する無關心や不信が最も明瞭に顯はれて來る。前者に於ては、神秘主義的な超越感がメタフィジックなニュアンスを湛へ、後者では審美的な意匠によつて幻想がロマネスクに展開されてゐる。作者は日記で再三記してゐる通り、何か快い狀況に接したり、自分の瞑想にとらはれたりすると、周圍のものが消え去り身が痺れるといふ感じに襲はれ忘我の境に入ると云ふ。「もう一つの眠り」で「他の人々が僅かに精神で想像することを、肉の眼で觀る獨特な力」(8) と主人公に云はせてゐるが、この「肉の眼」《les yeux de la chair》といふことは、作者自身に備はつた天賦の神秘感を意味するものと思ふ。

さて、グリーンの多くの作品に於て、前半はすべて人間の現實條件からの脱出或は超越の意欲と行動を表はしてゐるが、結末は悉く主人公の死もしくは精神分裂による失脚となつてゐる。この事は明かにこのカトリック作家のペシミスムを表はしてゐると思ふ。作中人物は現實の轍に陷りながらも、何か出口を求めて暗中摸索するが、地上の絲園《des prés verdoyants》に通じる道は閉されてゐる。例へば、アドリエンヌは、退屈な父と、病氣でヒステリックな姉との三人暮しで、その餘りにも單調で習慣的な生活に烈しい嫌惡と倦怠を覺え、ある日戸外で、近所に住むモオルクールといふ醫者と出遭つてからといふものは、その男のことばかり想ひ續けるやうになる。たつた一度見かけた男の悌が、彼女の心に燒きついて離れず、「あかしで莊」といふわが家の窓から、醫者の假住居である「白い離れ家」を忍び見るやうになる。「たしかに、あかしで莊から白塗の離れ家までは、ほんの二三歩といふ所だつた、それなのにこの僅かな跡りが二つの世界を引離してゐるのだつた。」(9) この樣に主人公が窓の外に求める世界と窓のこちら側は、「忌はしい定め」《une nécessité haineuse》によつて遮られて居る。この隔りを埋めようとして、グリーンの作中人物は次第に沒理的な行爲に馳り、外界との調和を失つて行く。カフカは未完の小說「アメリカ」で主人公の行爲を「空間の浪費」と稱してゐるが、人間行爲の不條理性を意味するこの優れた表現は又、グリーンの場合にも當てはまるのである。彼は、人間が自らの力で自分を克服し、合理的な救ひを見出すことは不可能だと考へる。例へば、「レヴィアタン」《Léviathan》のアンジェールにしても、「あれほど物欲しがつたこの世で、彼女は何物にも執着してゐなかつたのだ。」(10) といふ樣に完全に不安な狀態に陷つて自己存在にも關心を失ひ、一種の痴呆狀態になつてしまふ。「蕩屑」

《Epaves》に於けるアンリエットの心も「果なき暗い洞」《d'immenses trous noirs》と化してしまふのである。かくの如く、地上生活に於て、内的秩序が崩壊し、外界と自己の關係が破綻した所に、作者は信仰への契機を見出すのだと思ふ。グリーンにとつて神なき地上生活はたゞ偶然に支配される不明と苦惱の瞬間的な存在、いはゞ「難破船」の如きものに過ぎない。《それは作品の中で老衰に對する恐れ、死骸を見た時の戰慄などゝいふ形で具體的に示されてゐる。》何れにせよ、この作家には、人間生活の大部分が失脚だと考へられるのである。

そこでグリーンは信仰に道を求める譯だが、彼の直面する問題は自己矛盾即ち永遠への渴望と人間の限定性との矛盾である。この事が作品の根柢や日記の主要な懸案をなしてゐる。ヤスパースは、「哲學序說」でかう書いてゐる。「子供が、自分は他の人だと思つてみても、やつぱりいつも自分なのだ、といふ樣な疑問を抱く場合、そこには既に哲學的思索の源泉が認められる。」(佛譯)「汝なりせば」《Si j'étais vous...》に提起されたテーマもそれである。人間が何故自分は自分であつて他人ではないのか、と思つてみたり、何かになりたい等と空想する時、既に自我の現定性と超越意欲との矛盾を感じてゐる譯なのだ。この作品の表現樣式は前作の「ヴァルウナ」《Varouna》と共に、全然架空の物語で、ごく簡單に要旨を述べると、——ファビアンといふ主人公が惡魔の誘ひに應じて次々と他人になり變つて行くが、各人みな完全に自分を忘れ他人になり切ることが出來ず、初めのファビアンの名殘が漠然と最後迄消えずに殘つてゐる——と云つた樣に象徵風に書かれてゐる。主題を餘り抽象化しない樣な配慮が拂はれ、寫實的な手法が充分加味されてはゐるが、それが却つてこの作品をちぐはぐなものにした嫌ひはある。所で上記の問題についてこの作品から例を引くと、例へば、惡魔から變化の力を與つたファビアンは先づ勤先の社長プジャールの魂と入れ變り、その肉體は拔殼となつて傍に横はる。所が新たなプジャール＝ファビアンは自分の内心に漠然とどこか自分と違ふものがひそんでゐるのを感じる。自分の〈moi〉といふものが解らなくなつて、「私の自分は色々違つた性質と全然別の體を持ちながら、始終同じだ。第一自分とはどういふもので何處にあるのだらう。」[11] と自問する。この言葉は意識から決して離れることのない自意識と、はつきりとは摑めない自我の核心を表はしてゐると思ふ。更に云へば、それは常に變ることなき人間の限定された狀態であり、人間の完全な自由或は完成化に對する否定を示してゐる。グリーンのかうした考へ方

の底には、人間の悪や倦怠に對する無力感がひそんでゐるとも云へよう。一方、ファビアンを初め各人物に自己分裂を來し矛盾感を與へるものとして惡魔の存在が重要視される。それは人間の內部にあつて自己から脫出させようとし、半面自分の裡に引戻して束縛するといふ樣な相反する二つの力を持つて居り、人間自體の條件に於ける求心的で遠心的な動因であると考へることが出來る。蓋し現代文學に於ける神と惡魔の問題は決して決論を見ることの出來ないテーマであり、ヨーロッパ文學の悲劇的な面であると同時に、それをあらゆる方向に發展深化させた要因であらう。「惡の誘惑や惡に陷つた悔恨の情は、殆ど常に善の渴望よりも更に根强い文學的靈感の源泉であつた。」(12) といふカンテルの評言は、その點西歐文學の傳統的本質を衝いてゐる。勿論グリーンの場合も、その作中人物には一樣に人間的宿命として惡魔の重壓がのしかゝつてゐるのである。又、エミール・シモンは「悲愴な形而上學」《Une Métaphysique tragique》(Gallimard, 1951) で、ヨーロッパ人に於けるディレンマは、自意識に閉ぢ込められることを拒否しながら一方でそれを救はうとする所から起る、といふ意味のことを書いてゐるが、之も「汝なりせば」の場合によく當てはまると思はれる。カトリック信者であるグリーンが、如何に自己の卽物的な要素を排し、總ての執着を絕たうと念じても、それはやはり自己に限定されないといふ意味で、別の自己完成を目指してゐるのである。その點無限定とは云へ、沒個性的な佛敎的思惟の極致は、恐らくグリーンの如き西歐作家にとつて完全な自己喪失たる虛無と思はれるのではなからうか。青年時代彼は敎會を遠ざかつて消極的なニヒリズムへ沈潛し、一九三四年から五年間は佛敎思想やインド的思惟に惹かれた。三〇年代の作品「藻屑」「幻に生きる人」「ヴァルウナ」等には多少ともその傾向が見られ、死に恐怖の徵を認めず、それを絕對的無化の裏返しとして新たな生の展開と考へようとした。然し、それは結局死の魅惑と無化へのノスタルジーに止まり、究極に於てはその思想へつき進めない作者の躊躇を示してゐる。彼が自己を尨大に擴張し自意識過剩と自己分裂に惱むヨーロッパ人の一人として、インドの無感動な超越感や自己不在の中性的境地に興味を覺えた事は尤もだと思ふ。然しながら魂の實在と力を信じキリスト敎的靈魂觀を抱くグリーンが、魂を肉體と同樣それ自身の實體も存在理由も持たぬとする一般的なインド思想と完全に共鳴するとは考へられない。グリーンは飽くまで人間を個的に考へ、それを精神と肉體の二元體として考へるヨーロッパ人だつたのだ。

グリーンにとつての大きなディレンマは、自己と外界の問題をも含んだ靈魂と肉體といふ宗教的ディレンマである。例へば、前記の「汝なりせば」の一部と、特に最近作「モイラ」《Moira》では、人間が靈肉の分裂、相剋といふ面から宗教的に追求されて來る。これを裏付けるやうに、最近の日記である第四及び第五卷では、それ以前の日記よりも遙かに多くこの問題が記されてゐる。之は、四十年代からグリーンが再びカトリシズムへ復歸したといふ信仰上の變化によるものと考へる。彼が人間世界を超越し、魂を絶對化しようと熱望するならば、之に反する人間としての自然條件は、一切自己を限定するものと考へるのは當然である。從つてグリーンは肉體に與しようとする精神の働きを惡とし、之を憎惡する。「私は肉慾などなければいゝと思ふ。」[13]「私は性的本能を憎む。」[14]といふ彼の宗教的感覺は、生涯を通じて持ち續けてゐるものである。「モイラ」の主人公ジョセフには、かういふ作者のキリスト教的本能が擴大されてゐる。荒筋を云ふと——アメリカ南部の大學で、ジョセフ・デイといふファナチックなプロテスタンの學生が、同級の卑俗の學友達と反目しながら、ストイックな信仰生活を過す中に、一度び下宿の道樂娘モイラの存在を知ると、それまでひそんでゐた情慾を意識して苦しみ始める。モイラの妄想に惱まされてそれを絶ち難く、二度目に會つた時、內心の誘惑に負けて女と一夜を明した後、主人公は之を殺してしまふ——　主人公に對するプレロオといふ學生は、傲慢と本能の權化であり、かういふタイプの人物はグリーンの作品によく現はれ、性的本能を具現してゐる。ジョセフはプレロオの存在を無視し得ず、「その傲慢な顏をいきなり叩きつけたい。」[15]といふ衝動にかられ、或日二人は激しい格鬪をする。又、ジョセフは他人を視る嚴しい眼を自分に向ける時、鏡に映る己の顏にも望ましからぬ肉感的な所を見出すのである。かやうに前半に於て、表面的には主人公の外界及び肉體に對する嫌惡と反抗の念が漲つてゐるけれども、その裏には、ジョセフの肉感が潛在してゐることも暗示されてゐる。一方、モイラは現實的な人物といふよりも寧ろ作者一流のヴィジョンに彩られ、多分に象徵的である。つまりこの人物は後半になつて一寸現れるだけで、ジョセフはその前に彼女の存在を人から聞いて、未知の女にサンシュエルなイマージュを描く……といふ風に描かれてゐる。彼が自分の裡にひそむ肉感を自覺し始めるのと相俟つて、女のヴィジョンが纏綿としてからんで來るのである。從つてモイラは「僞り難い官能のメカニスム」[16]によつて、腦裏に自づと浮ぶイマージュなのである。男は女を知る前から自分の描く幻影に反抗する譯で、ジョセフにとつてモイラはやはり神と人間の間に立ち塞がる

宿命の一面を示すものと考へられる。「あいつは神と僕の間にゐるのだ。」(17)

從つて、この主人公の殺人行爲は、アドリエンヌが父親を殺したり、「レヴィアタン」のポールが犯す樣な全く狂的な性質のものとは趣を異にし、作者の倫理觀が顯れてゐると見ることも出來る。然し更に綜合的に考察すれば、グリーンの作中人物の殺人行爲には、勿論計畫的なものは一つもなく、宿命に流された末、一瞬錯亂狀態で「押へ切れぬ力」《une force irrésistible》に引曳られて犯す類のものである。そこに我々は、作者の主觀は別として、人間そのものに於ける絶對的自己統一への烈しいノスタルジーを見出すのだ。《ベルナノスの死後に發表された小說「惡夢」《Un mauvais Rêve》(Plon 1951)には、グリーンの作品と共通した傾向が見出される。女主人公のシモーヌ・アルフィエリが戀人の爲に殺人を犯すのであるが、作者はそこに如何なる對他的な合理的な動機をも認めようとしてはゐない。「……それはすべて嘘に過ぎなかつた。足もとに横はる滑稽な犧牲に對して、彼女は如何なる憎惡も實際に感じはしなかつたのだ。彼女がしみ〴〵と知り感じ燃し盡してしまつた唯一つの憎惡、それは自分への憎惡だつたのである。」(18) かくの如く、カトリック作家にあつては、究極に於て問題が自己に還つて來る。ベルナノスが、對外的な反抗やシニスムを自己憎惡の一變形と見做してゐるやうに、カトリック小說に於ける犯罪行爲は、自己肯定自己解脫に飛躍する最後的な契機を象徵してゐるものと考へられるのである。》

この樣な作品を書かずにはゐられぬ作者は、日常生活に於て絶えず黑い天使と鬪はなければならないことを痛感してゐる。蓋し、彼自身の內的苦鬪を綴つた日記から、地上の愉悅に對する追憶の嘆息が洩れて來る事も、絶無とは云へない。而もさういふノスタルジーは過ぎ去つた現實生活に關するものから夢幻化されて、遠くヴァロア王朝に馳せ(日記二、一九三五・四・五)、更には自然に全く包擁されたアダム以前の失はれた樂園時代へ逆る性質のものであらう。《リトアニヤ人のフランス詩人ミロス(一八七七—一九三九)を評して、ジャン・ルウスロがミロスにとつては母國リトアニヤが「樂園そのまゝの象徵」であると云ひ、そこでは「人間がアダムの僞りを覺える前、ゆかしさと調和の世界の他は知らなかつた」(19) といふ詩人の言葉を引用してゐる。今、グリーンが「三十を過ぎても尙、今は全く失はれてしまつたものに譯もない哀惜の念を抱いてゐる。」(20) と歎じてゐることを考へ併せる時、世代もスタイルも異るこの兩者に、たゞ人間性の點で非常に似た所を見とめずにはゐられない。》

既成の教義に安定し、人間の眞相に盲目であつたり故意に眼を掩つたりすることは、グリーンの望む所でない。彼によれば、小心翼々たるキリスト者は、神を害ふまいとして偉大な小説は書けない、却て危險を冒すことが神の嘉する所となり、同時に小説家の天職を全うする所以なのだ。それ故「モイラ」では、危險な動的な信仰につき進んで行く主人公と、宗教に定住する學友ダヴィッドが對蹠的に二つの態度を示してゐる。前者は、純粹な心の持主が存在することを疑ひ、後者の潔白な言動を訝る。彼には人間の既與條件に於ける眞實を看逃すことが出來ず、人間の裡に二つの世界（神の國と地上の國）を意識する。そして、この二つが人間の心でお互に斥け合ふことに堪へなければならない。日記に「肉體的な人間が精神的な人間と共に生きる。」[21] と書いてゐる樣に、グリーンにとつて人間の條件は靈肉の共存といふ點に還元されると思ふ。然しながら、彼は勿論固定した尺度で靈肉の限界を圖式的に區分しはしない。日記の第五卷では「兩者の間には如何なる境も感じられない。何れにせよ、まるでそんなものはないかのやうに、絶えずその境は侵されてゐるのだ。」[22] と斷言して居る。從つて、精神を神聖視し、肉體を一方的に不淨なものとする考へ方などは、愚劣なことであつて、さういふ單純な肉體嫌惡の觀念はマニシェイスム（マネス教）の名殘だとグリーンは考へてゐる。ジョセフはその點、作者と袂を別ち、肉體を嫌惡し恐怖する餘り、精神性に對するドグマに陷る。かうした主人公の盲點に對して、キリグルウといふ冷悧な人物が、ジョセフは肉體を嫌惡しその中に敵だけしか見ようとしない……青年が肉體的戀愛のことを考へるのは當然のことだ、といふ意味のことを主張する。これは、作者のパウロ的な肉體觀に裏付けられて居り、デモンは精神にひそむといふ考へを示してゐると思ふ。彼に云はせれば、靈魂と肉體の觸れ合ふ所に人間條件のドラマが起り、それが人間を神秘極まりなきものにするのである。グリーンは過去に於て、精神分析學にも大いに興味を抱き、フロイドやステッケルを味讀しユンクの講演を傾聽したりしたので、特に中期以前の作品にはその影響がはつきり認められる（恐怖の心理分析、無意識にひそむ心理的遺産等）。けれども、如何に之等の科學者達が說明しても、人間の神秘は解けず、その存在の根源は不可解である。而して、小說家はさうした人間の最も暗い深みに宿つて、魂の內奥に生滅するものを視ることを使命とする、この樣に彼は信じてゐる。而も結局さういふ人間存在を探求する人間自身の眼には限りがあり、究極に於てはそれを「神の働きかける秘密の場」[23] と見做すのである。然しながら、このことはグリーンが人間を神に全く委ねたことを意味するものではない。

彼が人間的な聖性を目指すが故に惡の根源を自己＝人間の裡に見出し、それを生涯背負ひ、それと闘つて行くといふ態度を失はず、自己の圏内に生きて赤裸の體驗を作品に訴へるといふ點では、神を信じない優れた作家達と異るものではないと思ふ。その意味で、ガエタン・ピコンがこの作家の作品を評して、「心理的な或は社會的な記錄ではなくして、メタフィジックな表象であり訴へであつて、彼のファンタスティックな技巧は、この表象と訴へを感じさせる方法に過ぎない。」と書いてゐるのは正鵠を得てゐる。（一九五二・九・二）

引用原文

(1) 《tout ce qu'elle savait de l'invisible, de la religion,》(Journal V [1946. 12. 27], p. 80)

(2) 《Je me faisais l'effet d'un homme qui, rêvant qu'il est parti, s'éveille tout à coup et se voit chez lui : va-t-il s'émerveiller de retrouver sa chambre ?》(Journal V [1945. 9. 29], p. 230)

(3) 《L'homme moderne ne peut plus ou ne veut plus interpréter l'univers en le faisant entrer dans les cadres d'un système philosophique ou religieux. Il voudrait ne plus s'écarter de son expérience intérieure et directe.》(R. Kanters : La littérature contemporaine et le pouvoir des clefs, p. 29. La Table Ronde, août-septembre 1950)

(4) 《. . . , j'ai toujours vécu dans le sentiment d'un vague danger, . . .》(Journal [1951. 4. 14], Figaro Littéraire)

(5) 《Emily se taisait.》(Mont-Cinère, p. 9)

(6) 《Elle avait le dos tourné à sa mère et regardait par la fenêtre.》(Id., p. 10)

(7) 《Debout, les mains derrière le dos, Adrienne regardait le *cimetière*.》(Adrienne Mesurat, p. 3)

(8) 《cette faculté particulière de voir par les yeux de la chair ce que d'autres se représentent faiblement par l'esprit.》(N. R. F. juin 1930, p. 822)

(9) 《Certes, il n'y avait que quelques pas de la villa des Charmes au pavillon blanc, mais ces pas séparaient des mondes.》

(Adrienne Mesurat, p. 96)

(10) ‹ Dans le cours de cette vie où elle avait désiré tant de choses, elle ne s'était attachée à rien.›

(11) ‹ Mon moi est toujours le même, avec des attributs différents et un corps tout autre. D'abord qu'est-ce que le moi et où réside-t-il › (Si j'étais vous. . . , p. 73)

(12) ‹ Les séductions du mal, ou le remords d'y avoir cédé, ont presque toujours été des sources d'inspiration littéraire plus vivaces que les aspirations vers le bien.› (La littérature contemporaine et le pouvoir des clefs, p. 66)

(13) ‹ Je voudrais qu'il n'y eût pas de désirs charnels.› (Journal V [1949. 1. 16], p. 233)

(14) ‹ . . . je hais l'instinct sexuel.› (Id., [1949. 2. 26], p. 241)

(15) ‹ une envie soudaine de frapper cette tête orgueilleuse › (Moïra, p. 28)

(16) ‹ Un mécanisme que rien ne pouvait fausser › (Id., p. 151)

(17) ‹ Elle est entre Dieu et moi, . . . › (Id., 192)

(18) ‹ . . . , tout cela n'était que mensonge. Contre la ridicule victime étendue à ses pieds, elle n'avait jamais réellement senti aucune haine. La seule haine qu'elle eût vraiment connue, éprouvée, consommée jusqu'à la lie, c'était la haine de soi.› (Georges Bernanos : Un mauvais Rêve, p. 243) (Plon 1951)

(19) ‹ . . . où l'homme, avant le mensonge d'Adam, ‹ ne connaissait point d'autre règne que celui de la grâce et de l'harmonie.› (Jean Rousselot : O. V. de L. Milosz, p. 24) (Ed. Seghers, 1949)

(20) ‹ . . . moi, j'ai encore, à trente ans passés, le regret absurde de ce qui ne sera jamais plus. . . . › (Journal I [1932, 9. 11], p. 101)

(21) ‹ L'homme charnel vit avec l'homme spirituel.› (Journal V [1947. 1. 9], p. 85)

(22) 《Entre les deux, nulle frontière sensible, nulle frontière en tout cas qui ne soit violée à chaque minute, comme si elle n'était pas.》 (Id., p. 186 [1948. 7. 22])

(23) 《la région secrète où Dieu travaille》 (Id., p. 126 [1947. 11. 3])

著　作　年　表

○ 1924年 Théodore Delaporte といふ名で《Pamphlet contre les catholiques de France》 (Ed. de le Revue Pamphlétaires)

David Irland なる匿名で《Lamb》論を發表 (雜誌 Vita)

○ 1925年 《La vie de Samuel Johnson》《Charlotte Bronté et ses sœurs》 (Revue hebdomadaire)

○ 1926年 《W. Blake》論 (Revue Européenne)

《Mont-Cinère》 (Plon)

○ 1927年 《Adrienne Mesurat》 (Plon) (Prix Bookman 1928)

《Le voyageur sur la terre》 (Gallimard)

(學生時代, 大學雜誌に載せた "The Apprentice. Psychiatrist" を作文で書き改めたもの)

《Suite anglaise》 (Les Cahiers de Paris)

○ 1928年 《Clefs de la Mort》 (Pléiade) (Ed. des Cahiers libres)

《Christine》 (1926年作) (短篇) 及び《Léviattran》 (短篇) (Ed. des Cahiers libres)

《Un puritain, homme de lettres: Nathaniel Hawthorne》 (Ed. des Cahiers libres)

○ 1929年 《Léviathan》 (Plon) (長篇) (Prix Harper 1929)

○ 1931年 《L'Autre Sommeil》 (Gallimard)

○ 1932 年 《Epaves》(Plon)

○ 1934 年 《Le Visionnaire》(Plon)

《Les pays lointains》(未完)

○ 1936 年 《Minuit》(Plon)

《Malfaiteur》(未發表)

○ 1938 年 Journal I (1928〜1934) (Plon)

○ 1939 年 《Journal II》(1935〜1939) (Plon)

○ 1940 年 《Varouna》(Plon)

○ 1942 年 《Memories of happy days》(Harper) (Prix Harper)

○ 1943 年 《Basic verities》(Pantheon books) (Péguy の拔萃を姉 Ann と共譯したもの)

○ 1946 年 《Journal III》(1940〜42) (Plon)

○ 1947 年 《Si j'étais vous. . .》(Plon)

○ 1949 年 《Journal IV》(1943〜1945) (Plon)

《The mystery of the charity of Joan of Arc》(Pantheon) (Pégny : Le mystère de la charité de J. d'Arc の譯)

○ 1950 年 《Moïra》(Plon)

○ 1951 年 《Journal V》(1946〜1950)

○他に，その後の日記が，Figaro littéraire 紙，及び Revue de Paris に掲載された。又，1947 年春，Robert Bresson の依頼で，聖イグナチウスのシナリオを書いたが，映畫化（イタリー）については不明。